

Ⅲ 大腸CT検診の検査・読影技術の到達点

8. 大腸CT検診の運用方法

— 検診施設/総合病院/クリニックにおけるノウハウ

4) 済生会熊本病院予防医療センターにおける大腸CT検診の実際

田上真之介 / 満崎 克彦 / 松田 勝彦 / 井野 雅基 / 松永 久実
三原 晴美 / 小西 瞳 / 岡本 直華 / 村川 彩希 / 興梠 静香

済生会熊本病院予防医療センター

済生会熊本病院は1961年から集団検診業務を開始し、1995年の病院新築移転時に院内併設の総合健診センターとして徐々に事業を拡大してきた。しかし、院内での受け入れが限界に達したため、2002年に独立した6階建ての健診棟を病院の別棟として竣工し、予防医療センターとして現在、年間約4万5000名の施設内健診を行っている(図1)。

近年は、「集団から個へ」をスローガンに、個人に特化した健康管理を提供すべく人間ドックメニューを検討し、会員制健康クラブの導入や、メディカルフィットネスセンターの提供を行っている。また、2009年の64列マルチスライスCTの導入を機に、2010年度より大腸CT検診の運用を開始した。

診療放射線技師は病院全体で48名、そのうち10名が予防医療センターに在籍しており、定期的なローテーションを行っている。大腸CT検査以外にも、低線量肺CTや脳ドック、非造影冠動脈MRIを用いた心臓ドックなども提供しており、CT、MRI、マンモグラフィ、胃透視における診療放射線技師による一次読影補助にも積極的に介入している。

大腸CT検査数の推移

当院での全大腸内視鏡検査と大腸CT検査数の推移を図2に示す。全大腸内視鏡検査が年間2000件を超え受け入れの限界となり、その代替検査として始めた大腸CT検査は、導入初年度から右肩上がりでの件数が増加し、近年は年間約850件程度で推移している。現在は6件/日を上限に設定し、予約制にて運用している。そのほかのCT検査として、低線量の肺CTを約30件/日、内臓脂肪CTを約5件/日、冠動脈石灰化スコアCTを約2件/日を実施している。

大腸CT検査の流れ

当院での検査のワークフローを図3に示す。流れに沿って各ワークフローを紹介する。

1. 前処置

当院では以前より、さまざまな腸管洗浄剤、前処置法を実践してきた。高張法では飲用量が少なく受診者負担が少ない反面、残便が多くなる傾向が強く、等張法では飲用量が多いため残便は少なくなるが、残液が多いという傾向が強くなり、かつ受診者の受容性も低いという課題があった^{1), 2)}。そこで、近年は両者の中間的な容量を飲用することで受容性を高め、大腸CT検査用経口造影剤「コロンフォート」(伏見製薬所社)の発売に伴い、表1のプロトコルにて運用している。また、当院では、当日飲用法と前日飲用法をそれぞれ提供しているが、前日飲用法では院内の規定により、腸管洗浄剤の提供において事前に一度来院してもらう必要があるため、受診者の利便性が悪く、当院での運用は当日飲用法が大部分を占める。したがっ



図1 予防医療センター
外観